

新春二〇二六

AIと社会進化の先は

AI(人工知能)が急速に発達し、私たちの生活や仕事が大きく変わりつつある。半世紀以上の研究を経て、生成AIが普及したこの数年で一挙に身近な存在となった。AIがあらゆる分野で人間の知能に並び、そして追いつくシンギュラリティ(技術的特異点)も現実味を帯びてきた。本格的な「AI時代」の幕が開き、人類や社会はこの先どう進化していくのだろうか。

(高山浩輔)

AI時代

京都橋工大学の松原仁教授は、日本のAI研究のパイオニアだ。漫画家、手塚治虫が生んだAIロボット「鉄腕アトム」のファンでもあり、将来の実現を予見する。松原教授が描くAIの未来予想を聞いた。

「AI開発の現在地は、『2010年代以降、ディープラーニングという機械学習の技術で急激に進歩した。文章や画像などを作り出す生成AIは人間の領域と思われてきた『創造』の能力も備え、世界を根本から変える存在になりつつある』

「人間並みの知能を持つAGI(汎用人工知能)の実現も近いと言われる。『人は目や耳で世界を認識して成長するが、AIも画像や音声を取り込むようになり、原理的にはほぼ同等になった。既に医師国家試験や司法試験に合格する力がある。感情面を除けば30年には総合的に人間と並ぶ知能が実現するだろう』

「人の働き方はどう変わっていくのか。『デスクワークはAIが担うようになり、人の役割は管理や意思決定が中心になる。一方、AIは責任を取ることで、どの仕事もトップレベルは人にしかできない。介護のような丁寧な肉体的業務や気遣いもまだ代替は難しい』

「AIとロボットの融合も注目される。『技術の進歩が逆転し、今はAIよりロボットの方

が人との距離がある。例えば、ロボットは糸を結ぶこともジャンプすることもまだおぼつかない。50年ごろには人並みの運動能力がある人型ロボットが完成するだろう。私が研究者を志したきっかけの鉄腕アトムも現実になるのではないかと。AIの行き着く先は、

「人より賢いASI(人工超知能)が誕生するかどうかは研究者の中でも意見が分かれ、私もまだ確信はない。ASIは自ら改良を重ねるため、人のコントロールを超える。働かず暮らせる社会になるかもしれないし、人類を滅ぼそうと考えるAIが出てくる可能性もゼロではない。だが世界の開発は止まらない。AIとどう付き合っていくかは、よく考えなければならぬ」

2050年ごろ

高度な人型ロボットとAIの融合

・人間並みの運動能力があるロボットにAIが搭載。介護など身体を使う労働にも浸透する



2030年ごろ

AGI(汎用人工知能)

・総合的に人間並みの知能を獲得する
・デスクワーク中心にAIへの置き換えが進み、人間は意思決定や責任を受け持つ



2025年

ASI(人工超知能)

・あらゆる分野で人間の知能を上回り、自己進化を繰り返すことで人間の理解を超える



現在

特化型AI・生成AI

・人間の指示を受け文書や画像、動画の作成を行う
・囲碁など一部分野では人間をしのぐ



松原教授が考えるAIの未来



松原 仁 教授

写真/三木千絵 グラフィック/伊藤和佳奈

生成AI 学習した大量のデータから文章や画像、動画などを作り出す人工知能。米オープンAIが対話型の「チャットGPT」を2022年に公開して以降、瞬く間に社会に普及し、開発競争の

激化とともに急速な進化を遂げる。生産性を飛躍的に高める効果が期待される一方、巧妙な偽情報「ディープフェイク」の拡散や知的財産権の侵害なども懸念されている。

経営議論もバーチャル

生成AIと対話し、経営の視点を広げる先端施設が京都市中心部にある。外資系コンサルティング大手のアクセントチュアが2024年11月に開設した「AIセンター」だ。

拠点にはビジネス街の四角島丸近くのビルにある。訪れる客を迎えるホストはAIやロボット。入り口ではAIに社名を尋ねられる。受付を済ませると、AI搭載の四足歩行ロボットが目指す場所まで最適なルートで案内してくれる。

施設は主にターゲットは

大企業の経営層だ。開設から1年で全国の約70社・団体の幹部を受け入れた。目玉はAIと対話する「バーチャル役員会議」。

実演では「生成AIは京都観光にプラスか」という問題提起に対し、賛成派と反対派の「AI役員」が議論を始めた。実際の運用では利用企業のデータをAIが補助する「AIエージェン



経営課題などについてAIと対話できるシステム(京都市中京区・アクセントチュア・アドバンスド・AIセンター京都)―撮影・吉原直歩



画面上に可視化された対話型AI。来訪者の受付を担う



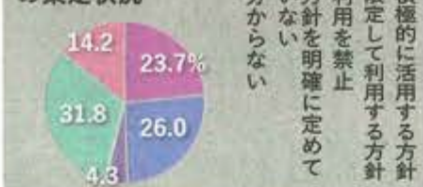
AIが制御し、来訪者を案内する四足歩行ロボット

各国の企業における業務での生成AIの利用率



※いずれも2025年発表の総務省調査から

国内企業における生成AIの活用方針の策定状況



分らない

一方、保科氏はAIの活用で効率化が極限に近づくと、人にしかできない業務が競争力を決定づけるとみる。「コンサルティングでも記者でもオフィス内の仕事はAIに任せ、社外でのコミュニケーションで相手先と信頼関係を築くことが大事。ネット上で見つけられない情報を引き出す力が一層求められると思う」